

# サーフィンによるライフスタイル移住と場所アイデンティティの再構築 —宮崎県幸島周辺のサーファーを事例に—

Reconstruction of place identity and Lifestyle migration of Surfing

—The case of Surfers around Kojima, Miyazaki Prefecture—

岩本 晃典

Akinori IWAMOTO \*

## 要 旨

2020 年、東京オリンピックの新種目にサーフィンが選ばれた。サブカルチャー的要素を有したライフスタイルスポーツと呼ばれているサーフィンが、国家を代表とする舞台で競われる「正式な」スポーツと変化しているのである。そうした潮流がもたらす変化は、競技の場だけで起きているわけではない。サーフィンは、地域社会の砂浜や海といった地域資源の利用や地域の景観、文化に影響を与えているのである。スポーツと地域社会が会う時、どのような影響や変容が起きているのだろうか。社会的なスティグマが残るサーフィンを事例に、サーファー達が地域社会に移住し、地域の一員として生活している実態を見ていく。サーファーと地域社会の交流による地域の経済的、文化的な場所アイデンティティへの影響を明らかにすることで、スポーツの持つ地域創生の可能性を検討する。

<キーワード>：サーフィン、地域社会、場所アイデンティティ、ライフスタイル移住

## 1 はじめに

### 1.1 研究背景

宮崎県では、2019 年 9 月、国際サーフィン協会（ISA）が主催する最大規模の国際大会が開かれ、多くのプロサーファーやアマチュアサーファーが訪れてた。以前からも、サーフィンの適地としての適正があるため、サーフィンを主因とした移住現象が確認されるなど、サーフィンのイメージが形成されている地域である。それは、過去の県政によって構築されたハワイ風の空間整備によるものも影響している（山中・長谷川 2007）。

上記のような沿岸部の地域社会は「サーフィン・ディスティネーション（小長谷

---

\* 滋慶学園札幌ベルエポック製菓調理専門学校 非常勤講師  
北海道大学 国際広報メディア・観光学院 修士課程

2005)」と呼ばれ、近年、サーフィンのナショナルなスポーツとしての認識が大衆化しつつある中で、サーフィン文化の場所性が構築される途上にあるといえよう。

しかしながら、「1980年代以降からメディアは『サーフィン公害』やサーファーの大麻所持に関する事件などの事件を取り上げる記事に傾倒していった」（小長谷 2005：10）ことをきっかけに「サーファー＝危険」な存在であることがメディアを通じて拡散し、地域社会のサーファーの認識に影響しているという歴史的な背景がある（小長谷 2005）。つまり、社会的なスティグマが地域社会において伝播し、それがサーフィン文化に内在している可能性があるのだ。その対策として、現在も宮崎県サーフィン連盟（MSA）は再発防止に取り組み、サーフィンの社会的イメージを向上しようとしている。

一方で、近年ではサーフィンの適地を求めて、移住する人々が地域社会の文化の担い手となり、生活を支える主体となっている現状も見られてきた。また、サーフィンと移住を主題とした研究も近年確認されるようになり、地域の政治、経済、文化へ影響する可能性のあるスポーツであることがわかってきたのである。こうした豊かな生き方を求めた移住現象は「ライフスタイル移住<sup>1</sup>」と呼ばれ、近年の移住研究において注目されてきている。では、社会的なスティグマを持つサーフィン文化が地域社会に参入する時、地域に対してどのような影響が発生してくるのだろうか。その実態を紐解くことによって、スポーツがもたらす地域社会の文化や社会への影響の一端が明らかになるだろう。

## 1.2 サーフィン研究の潮流

研究の位置づけの中で、サーフィンはジェンダー論・若者文化論・メディア研究・ライフスタイルスポーツ研究など多岐にわたる分野において考察されてきた。

水野（2002）は、ジェンダー論の観点からサーフィン文化を「下位文化」と位置づける根拠として、サーフ・ショップという場所において男性優先主義的な言動や行動がサーファー達の中に見られることを論じた。「抵抗文化の要素を多く含んだサーファーの下位文化は、包括社会から逸脱した価値を支えるシステムもよく発達させている。それを支え、また維持していくための場や時間、仲間集団が必要となる」（水野 2002：56）という結論を導き出している。ジェンダーの視座から見るサーフィン文化には下位文化が内在しており、それが補完されるような仕組みがあるということを明らかにしたのである。さらにそうした文化は空間を占有し、男性優位な社会構造を作り出し場所のアイデンティティを規定していく構造にあることを明らかにしたのである。

また、小長谷（2005）は、サーフィンの下位文化としてのイメージはメディアによってサーフィンの情報が 대중化していく過程の中で形成されたと論じている。1980年代「サーフィン公害」や薬物事件などが新聞や雑誌、テレビなどのマスメディアによって社会の大多数が受け取り得ることになったことで、そのイメージは形成され定着したという研究成果がある。つまり、サーフィンの場所のアイデンティティがメディアを通して伝わり、空間を再構築したことを論じたのである。

近年の研究では、ライフスタイルスポーツの視座からサーフィンの政治性を考察する研究がある。ロサンゼルスのカリフォルニアビーチは、白人と黒人との間で人種的なヒエラルキーが再生産される場所と化している。それは、ハリウッドを中心とした映画やメディアにおける黒人の表現や、白人によるビーチ空間の占有、黒人の隔離や排除の影響があるのである。また黒人サーフィン協会による排除からの抵抗としてのサーフィン文化があり、こうした白人対黒人という構造の中でのカウンターカルチャーが形成されていることが明らかになったのである。一方で、こうしたサーフィンのスタイルは、白人社会の中に取り込まれ、消費されている（Wheaton 2019）。ここでは、サーフィンの場所のアイデンティティが人種という差異によって構築されていくプロセスを明らかにしている。

さらに、直近の移住研究では、サーフィンという観光行動を主因とした移住現象を取り上げる事例が複数確認されるようになってきた。つまり、サーフィン観光が移住へ繋がるメカニズムの分析がなされてきているのである。

武知（2018）は、地方創生の一環として、サーファーの観光行動から移住へのメカニズムが地域活性化につながるという研究を行った。この研究では観光者から移住者になるサーファーのプロセスを分析し、それをライフスタイル移住の概念で捉えようと試みている。都市に住んでいた若者がその生活環境から「離脱」し、新たな環境でサーフィン文化の担い手として暮らす現状をライフヒストリー法に則って描いたのである。さらに、村田（2018）は漁師になったサーファーのライフヒストリーを使って分析し、サーファーの属性を持つ移住者が地域経済の生活の担い手となり、自己のアイデンティティを形成していく様子を明らかにした。

谷川（2004）はライフスタイル移住した人々の分析において、サーファーを一例として挙げている。そこではサーファー団体が移住者と地域コミュニティとの橋渡しの機能を担っていることを明らかにした。一方で、麻薬の使用や家賃の踏み倒しといった行為がサーファーに対するスティグマを形成し、サーファーコミュニティとして地域社会から阻害

されるといった状況があったことも明らかになっている。そのようなスティグマが彼等の経済活動に影響して、アルバイトができなくなることもあった。スティグマの他に「いい波が立っている情報が入れば、仕事に行かないでサーフィンをする」（谷川 2004：70）というサーフィン文化特有の性質があると考えられる。このようにサーフィン文化によって生産の時間が規制される現象や生産の時間の持つ拘束力とサーフィンという「余暇活動」への渴望の間で揺れ動く移住した人々の日常が垣間見えるだろう。

サーフィン文化は、特定の地域社会における政治、経済、文化、アイデンティティに影響を与えてきたスポーツであることがわかる。本研究では、サーフィンによるライフスタイル移住の現象が地域社会へ与える影響を分析することで、スポーツの地域社会への文化・社会的役割を明らかにしたい。

### 1.3 分析概念

本論では、サーファーと地域社会との相互作用を明らかにすることを試みる。移住者自身の文化と地域文化が絡まりあう時、人々の揺らぎを捉える概念として「場所アイデンティティ」が有効となると考えられる。なぜならば、前述したようにサーフィンは地域の共有資源を利用しなければ成立し得ないスポーツであり、そうした地域社会という場所における他者との相互作用を捉えるためには、相対的に自己を形成していくプロセスを捉えるアイデンティティ概念が有効であるからである。では、アイデンティティ概念に場所が組み込まれ、概念化されていくプロセスを見ていこう。

はじめに、Erikson によって提唱されたアイデンティティ概念を確認したい。これは、同一性と連続性を主観的に所有しているものと自覚している「性格」とであると論じられている（Erikson 2017）。また、アイデンティティの形成は「心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとのすべての相互作用が重要性を持ち、そうした一種の心理・社会的相対性としてのみ概念化されうる」（Erikson 2017:13）と述べられている。よって、本研究における対象同士の相互作用を相対的に把握するためには適した概念である。この概念に則って本研究を換言すれば、サーファーのアイデンティティと地域社会にある既存の場所のアイデンティティが、分かちがたく交錯する現象が発生し、それぞれに影響を与えているのである。

また、アイデンティティは「生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己である」（Giddens 2005：57）と論じられており、客観的に自己を何らかの媒体を

通してフィードバックさせる時に理解できるものだということが分かっている。

流動化した社会が進行するにつれて、人々は「自らが何者であるのか」「どこに所属しているのか」「故郷はどこなのか」などといった様々なアイデンティティを希求し、生活する構造が創られてきている。「共同体のあり方が姿を変え弱体化し『個人化』が進めば、アイデンティティの問題が前景化する」（須藤 2012：12）社会が到来してきたのである。

一方で、Bauman（2001）は上記の研究者とは異なる意見を呈している。バウマンによればアイデンティティとは「調和、論理、統一といったもののイメージを、おぼろげに連想させているもの」（Bauman 2001：107）であり、それは「目の錯覚」とであると論じている。「目の錯覚」という言葉が言わんとしていることは、アイデンティティが「心理・社会的相対性」によって現れるものという前提から、「今ここ」に確かに存在するものであるが、主体によって定義が異なる場合があるため揺らぎが生じている不確実性が高いものであるということである。またそれは、消費という普遍的依存が他者と異なる個人的自由としての「アイデンティティをもつ」自由を獲得するための必須条件となりえるのである（Bauman 2001）。

さらに、現代社会における「グローバリゼーションの過程でダイナミックに進行する人、モノ、資金、情報などの流動化現象は、日常の生を営む個々人に、アイデンティティに自覚的にならざるを得ない状況を生み出している」（大野 2011：155）のである。

つまり、現代社会におけるアイデンティティとは、他者との遭遇とそれによる差異によって相対的に形作られた統一性なのであり、人々がアイデンティティを希求し、その揺らぎに苦悩するような社会問題は「リキッド・モダニティ」（Bauman 2001：33）という状況を生産しているのである。

須藤（2012）によれば、観光による移動はアイデンティティの生産装置であり、観光はアイデンティティを育む最も重要な文化的媒体であると論じている。つまり、観光する側（ゲスト）における観光行為は、遭遇する様々な社会的な事象を通してアイデンティティを形成する手段となるものである。

そうした概念に場所が接合した場所アイデンティティの概念は「経済的、空間的基盤に基づいて設けられた差異を通じて、場所間のヒエラルキーと移動が生じ、住まいと労働の空間的基盤やそれをめぐる意識や感情が変容するもの」（金 2017：17）と定義付けられている。また、Relph（1999）は『場所の現象学』において場所のアイデンティティに関して以下のように論述している。

「場所のアイデンティティとは…私たちの場所経験に影響を与えまたそれによって影響されるような、場所経験の基本の中に共通性を確認するというもっとも基本的な行為でもある。そして、重要なのは場所のアイデンティティだけではなく、個人や集団がその場所に対して持つアイデンティティであり、とくに彼らが場所を『部内者』として経験するのか、あるいは『部外者』として経験するのかということである」(Relph 1999 : 121)。

つまり、場所アイデンティティはある空間における規範や経験の共通性であり、それは行為者のアイデンティティに作用しながらも、場所へも影響する可逆性のあるものである。また、それは「内側」と「外側」による影響を受け形成されるものだ (レルフ 1999)。場所アイデンティティは内部と外部が混交する中で生産される共通の性質なのである。上記の理論を本研究の対象に照合すると、移住者がアイデンティティをライフスタイル移住によって形成しながら、その一方で地域社会が移住者を認識していく過程において「地元」の場所におけるアイデンティティが輪郭を帯びてくる構造がある。つまり場所アイデンティティは他者との接触によって再構築され、生産されるものであり、それは自らが「部内者」なのか「部外者」なのかという経験する立場によっても異なるものであるのだ。

まとめると、移住者サーファー家族のアイデンティティと地域社会における場所アイデンティティの交錯によって、双方が変容したり、阻害されたり、再生産されたりする現象がライフスタイル移住で発生していると考えられる。本論文では、サーフィンを主因とするライフスタイル移住によって地域社会にもたらされた影響や変容を場所アイデンティティから考察する。

## 2 対象の概要

### 2.1 移住するサーファー達

2011 年以降、宮崎県串間市の市木地区では多くのサーファーが移住してきているといわれている。移住現象が加速していった当初は空き家が多かったこともあり「地元」の住民は「若い人が来てくれれば」と歓迎して空き家を貸していたのだが、色々なトラブルが発生したことで「地元」は空き家をあまり提供しないような雰囲気に変化した。移住してきたサーファー達が、夜中に家に大勢で集まって騒ぐことや、無許可で賃貸の家の中の木を切って広間にし、土間で焚き火をするなどということが発生したことで、所有者や近隣

住民だけでなく「地元」の反感をかったのだ。このような度重なるトラブルによって、市木地区では「移住者」というスティグマが形成されてきた。

また、他者に対する抵抗感という文化的な変化だけではなく、住環境の条件の変化によって移住に歯止めがかかりつつある。現在、市木地区には経年劣化などによって住めるような空き家が少なくなっているのである。また住める空き家があっても所有者が亡くなったことで家財道具の処分に関する問題が解決せず、新しい所有者に貸す意思があっても貸すことができないという事態も発生している。こうしたことが市役所の設置する空き家バンクへの登録減少の要因にもなっている。

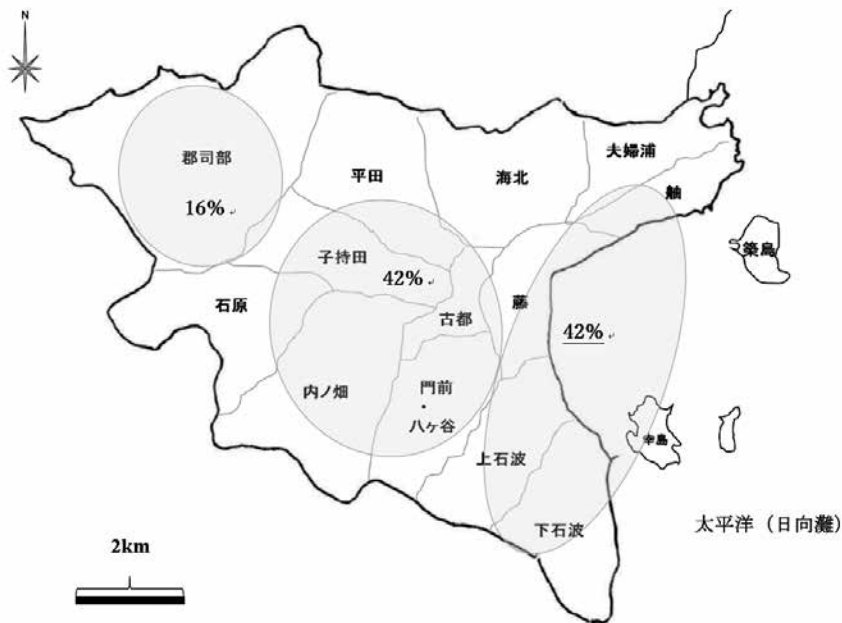
市木支所の元支所長は「ああいう人たちはいろんな考え方があって、あまり関わりたくないとか干渉されたくないとかがあります」と話しており、移住してきた人々の文化的な差異を認識していると考えられる。「移住者への抵抗感」や「ああいう人たち」といった言説からは、サーファー達を地域に住みながらも他者として区別している「地元」の思考が感じられる。つまり、現状は定住している「よそ者」として行政は彼らを見ていることがより鮮明になった。

このような移住現象の1つの背景となっているのは3.11であり、それを契機に移住をした人が多くいたそうだと。ただし、東北地域などの被災地からの避難というものだけではなく、周辺地域である東京や千葉などの関東圏に住む人々が3.11による影響を懸念し、被災地から遠い九州を選択し、何らかの情報網を通じて自然豊かな市木地区を知り、サーフィンや住環境の良さ知って移住したと考えられている。石波地区の自治会長の意見によると、市木地区にいる移住者（小学生の児童を持つ家族や夫婦で暮らす家族などを含む）の合計は30世帯以上、延べ100人ほどの人々がいるようである。

とはいえ、市の移住政策を利用していない人が大多数であるため正確な人口や分布は分かっていないのが現状であった。そのため、現地調査によって明らかになった移住者サーファー達が居住する場所を地区ごとに分けて分布図を作成した（地図1）。保育園に子どもを持つ16世帯のサーフィンを主因として移住した家族を対象に聞き取りを行い、分布図を作成した。その結果、沿岸地域（主に下石波・上石波・藤）に全体の42%が分布しており、沿岸部と山間部の中央あたり（主に八ヶ谷・門前）にも42%、山間部（主に郡司部）の地域に16%が居住しているという状況が明らかになったのである。

沿岸部のエリアに集中している理由として示唆できるのは、サーフィンの環境である。サーフィンのポイントまで徒歩で移動できるだけでなく、海から望める家もあるため、波

をチェックするには格好の場であることからこのような分布になっていると考えられる。また中央部のエリアにも集まっているのは、買い物や交通網の利便性といった経済性によるものだと考えられる。また、保育園と小学校にも徒歩 15 分圏内と近く、石波地区や藤地区といった 1 時間以上徒歩でかかる地域より子育てや生活の環境が良いという判断であろう。



地図 1：市木地区の移住したサーファー家族の割合図（筆者作成）

意外にも、800 名弱の小さな限界集落に、少なくとも約 60 名という予想を超えた人数が転入しているのである（保育園に子どもを預けている家族の統計）。さらに小学校や中学校に子どもがいる家庭や単身の家庭を入れると、その人数は 100 名に達すると考えられる。

## 2.2 地域資源を利用するサーファー達

市木地区において多くのサーファー達が利用する場所は、市木地区の沿岸部にあるサーフィンスポットとして認知度のある石波海岸<sup>2</sup>だ。ここはローカルサーファーやビジターサーファーにおける集合場所のような存在でもある。市木地区に転入したサーファーの人々を対象に、この海岸での参与観察を実施した（写真 1）。



サーフィンによるライフスタイル移住と場所アイデンティティの再構築  
—宮崎県幸島周辺のサーファーを事例に—



写真 1：石波海岸の様子（2019/9/11 筆者撮影）

石波海岸はサーフスポットだが、弧を描く海岸の形状や生息する動植物郡の希少性が評価されたことで「渚 100 選」に選ばれている場所でもある。また、石波海岸の沖合いには幸島と呼ばれるニホンザルの生息地がある。幸島は 1934 年に幸島猿生息地として天然記念物に指定された。以前は小学校教育の国語の指定教科書の題目で「幸島のサルのイモ洗い」が取り上げられたこともあり、ある世代では認知度が高くなっている。この島は石波海岸から約 150m の沖合にある周囲約 3.5km の小島で、「猿島」という別名も存在する。島内には亜熱帯性植物が繁茂し、日本猿約 100 頭が生息しており、地区住民たちは島に祭られている弁財天のお使いとして昔から保護してきた。1948 年から京都大学による調査が始まり、1968 年に京都大学霊長類研究所幸島野外観察施設（現在は幸島研究所に改名）が開所され、海水で「いも」を洗って食べるなど文化猿として貴重な資料を学界へ提供している（串間市 2019）。

現在は幸島に京都大学の学生や国内外の研究者が来訪するようになって久しいこともあり、より学術的な場所性を帯びるようになっていった。そのような研究活動によって幸島の知名度が上昇していくことで、島への渡し舟を運行する事業者も現れるようになった。この船によって研究者以外でも渡ることができるため野生のニホンザルを一目見ようと観光客も訪れるようになり、串間市の代表的な観光地になっていったのである。

数年前、こうした業績を評価して記念碑が作られ「100 匹目の猿現象」に関するイベントが開催された。現在は、串間市の代表的な観光地として位置づけられており、宮崎県や串間市のホームページだけでなく、ガイドブック等でも紹介されている。

こうした学術的な観光地としての場所性を有している幸島が対岸にあるため、サー

ファー達によって利用されるだけでなく、石波海岸も研究者や観光客、観光事業者が利用する場所となっている。この石波海岸を訪れた市木地区に住む移住者サーファー達へのインタビューでは、ビーチにおける文化を「ビーチカルチャー」と呼んでいた。彼らは石波海岸のサーフィンできるポイントを観光地の名前に準えて「幸島」と呼びながら、そのカルチャーを語ってくれた。

「幸島」を訪れるサーファーは様々であるが、ある特性が見られることが参与観察から明らかになった。それはロングボードを使用しているサーファーが多数であることだ。この砂浜から10キロほど南下した場所にあるサーフスポットの恋ヶ浦や、隣接する日南市の海岸ではショートボード<sup>3</sup>のサーファーによって使われている傾向にある。

だがこの場所は、地理的な条件においてロングボードに最適な波が立つ傾向にあるため、そのような特徴が見られる。そのような条件下において、移住しているサーファー達を観察するとロングボードもしくはロングとショートの間位置するミディアムサイズのボードを使用する人々の割合が8割以上と高いことが挙げられる。また興味深いことに、台風が接近する時期でもサーフィンが可能な場所であり、その時はショートボードによるサーファーも訪れるようになる。

海の中に着目してみると、ローカルサーファーが少なく、移住してきたサーファーやビジターサーファーが多く乗っている。ならびに、小中学生のサーファーや女性サーファーも多くいる傾向にあるようだ。「幸島」ではそうしたサーファーの多様性があり、小中学生や女性が波に乗る際、譲り合いや2人で乗るような現象が起こる。通常サーフィンでは沖にいる順で波を優先的に独占できることになっている不文律の約束事がある。それだけでなく、1つの波は1人が掌握するというルールが慣習的に存在しており、実際の競技スポーツのサーフィンにおいても適応されている。そうしたルールを無視するようなサーファーもいるが、ルールを破ると暴力事件に発展したりすることもあるという。

だが「幸島」ではこうした規範が厳しくない状況にある。彼らはそれを「Peaceful」な場所と呼び、その文化を維持していく必要があると述べていた。「幸島」に来訪するサーファー達がそのように述べる根拠としては、周辺地域のサーフスポットとの比較によるものだと考えられる。串間市に隣接する日南市の海岸や前述した串間市の恋ヶ浦では、ローカルサーファーが強固なローカルルールを設定している。例えば、「地元」でなければ砂浜を優先的に使えないという暗黙の了解や使用できる海の領域に関しても、ローカルサーファーはよく波の立つ場所を使えるがビジターサーファーはその権利が無いといった慣習

が強固にある。しかしこうした強固なローカルルールは地域における共有資源を保護するために「地元」が設置したものであり、地域環境を維持していくための合意である。

### 3 サーフィンと地域社会の交錯

#### 3.1 構築された砂浜のローカルルール

「幸島」では、このようなサーファーというよそ者の流入によって砂浜の利用におけるローカルルールが発生してきており、不文律であるものと明文化されているものが構築されてきている。その双方とも住民と自治会における承認を通して形成されている。

不文律であるローカルルールは、砂浜とその周辺における領域の区分けである。ビジターサーファーや移住者サーファーは、幸島の対岸から北に200mほど離れた場所をサーフスポットとして使用しており、駐車場もできるだけ北側のスペースを利用することになっている。地図2はその様子を空中写真で表したものである。四角で囲まれている場所は、幸島への観光客や研究者によって使用される駐車場である。一方、円形で囲まれているところは、サーファー達が慣例的に利用可能な駐車場と海岸である。



地図2：石波海岸における空間配置（国土地理院のデータより筆者作成）

石波地区の自治会長が定期的に石波海岸を訪れ、幸島の対岸でサーフィンをしている人や駐車スペースを誤っている人に対して注意喚起を行うなどして、このローカルルールは

維持されてきている。自治会長は2年ごとで更新されていくが、石波地区の自治会長は慣例としてこの役を担っていくことになっている。こうした取り組みの根拠には、幸島が観光地として認識され、宮崎県の観光スポットの代表的な1つとして位置づけられてきたという住民や自治会の自負と認識があると考えられる。

そのような観光地としての幸島において「地元」の考える「正当な客」とは、ニホンザルを見学に来る観光客であると考えられている。その思考によってローカルルールはサル見学者の観光利用を保護する意味合いが込められているのである。

また、京都大学の研究によって明らかになっている霊長類学の「専門知」に基づき、学術的な観光地を、研究者や観光客というアクターが利用しやすい環境となるよう、一方でサーファーの利用権を制限している。ここでは、同じ資源管理を行うアクター間に利用権の格差が存在していることが分かる。

これに対して、ローカルルールが明文化され可視化されているものがある。以下の写真は利用権の序列が垣間見える看板であり、サーファー達が利用する駐車スペースの目の前に掲示されていた（写真2）。砂浜の利用における注意喚起を促す看板ではあるが、幸島への観光客への注意喚起の看板は見られない。



写真2：砂浜の利用における注意を促す看板（2019/9/12 筆者撮影）

しかし、この看板は「サーフィン等をご遠慮ください！」という文言によってサーファー達への注意喚起の看板となっているのである。これは自然保護といった「専門知」を根拠とする正当性が「地元」において合意されているため、「正当な客」ではないサーファーを規制する意図があると考えても妥当であろう。

だが見方を変えたと、サーフィンを規制するためだけの目的で作られただけの看板というわけでもないことが分かってくるのである。この石波海岸は、水難事故防止のために条例で「水泳禁止」となっているのである。だが、この地域ではボードを利用するサーファーの遊泳に関しては「水泳とみなされない」として暗黙に了解されている現状にあるため、サーフィンが可能になっているのである。以下は、幸島の対岸のすぐ目の前にある「水泳禁止区域」の看板である（写真3）。



写真3：水泳禁止区域を示す看板（2019/9/13 筆者撮影）

しかしながら、石波海岸で「水泳」等の行為を行った者は、たとえニホンザルを見学に来た観光客であっても、地元住民や部落の自治会長に注意され、目に余るような者がいた場合は自治会長から地区の警察に通報され、注意される。実際、厳罰処分などはないため違反したあとの処分はないが、そうした地域の様々なアクターによる「目」によって排除される構造にあり、その後利用しにくくなることが、ある意味で処分であるとも言える。

ただし特例として、石波海岸を海まで流れる川があり、そこでは遊泳が黙認されることになっている。観光客やサーファーの子ども達はこの川で泳いで遊ぶ傾向にある。また「地

元」の子ども達も危険水域であるため、海で泳ぐことは少ないがこの川を利用する様子やボディーボードを持って泳ぐ様子を見かけることがある。このように石波海岸には、様々なアクターがいる。各アクター同士が共有資源を巡るルールや規制を作りながら、利用している様子が分かるだろう。

また「幸島」では強固なルールではなく、上記のように慣習的で穏やかなローカルルールが維持されてきている。サーフィンの場においては、一部のローカルサーファーと移住してきたサーファーそしてビジターサーファーによって合意形成がなされ、維持されている。ビジターサーファーからの意見では、ローカルサーファーや移住してきたサーファー達による穏やかな文化の形成が生み出したものだということが聞き取りで確認できた。また調査より「幸島」はサーファー達にとってローカルやビジター間でのコンフリクトがあまり見られない「ビーチカルチャー」を有した場所であることが明らかになった。一方で、地元住民・行政・研究者・観光事業者・観光客・サーファーなど多様なアクターによって利用されている場所でもあるのである。このような場所における規範を構築し、場所アイデンティティを構成するサーファー達はどのような活動を行ってきたのだろうか。

### 3.2 サーファー達と地域活動

市木地区の各部落では、地域活動の一環で共同作業が行われている。例えばごみの分別や墓掃除、道の草刈といった普段の生活では欠かせない共有地のメンテナンスである。地区住民は「出方」と呼んでおり、地域の住民であれば参加しなければならない。しかし、仕事や行事等で参加できない場合は、自治会の規範に則って何らかの方法で対処することになっているのである。共同作業が「地元」において意味することは、場所アイデンティティを維持することであり、また、場所アイデンティティのアクターを確認するということである。

全部落総出での「出方」では、毎年1回10月から11月の時期に石波海岸の清掃活動が行われている。この清掃活動は各部落の総体である市木地区自治会と、市の社会福祉協議会が協力して行っており、地域住民や地域の小学生・中学生、高畑山にレーダー基地を置く航空自衛隊の隊員などが参加して大規模に行われている。近年は、新しく転入した住民にも参加義務があるため、移住者サーファー家族も参加するようになってきた。

参加者は、朝9時ごろに石波海岸の幸島の対岸付近に集合し、手袋やゴミ袋が配布され地区ごとでそれぞれの担当箇所を歩きながらごみを拾っていく。流れ着いたタイヤや流木

などの大きなごみは地域の住民や自衛隊の大型機材を使って処理されていく。

半日がかりの作業ではあるが、毎年 300 人ほどが砂浜の持続的な利用のために皆で協力して行っているのである。普段では、顔を合わせない他の部落の住民とも会話ができ、交流の場としての機能もあるようだ。

一見すると、自治会の活動であるため、地域の伝統的な共同体における義務のように思われるだろう。だが実態としては、複雑な目的意識によって成り立っているのである。

サーファー達は普段「ビーチクリーン」といって、利用した海岸の清掃をするという文化がある。彼らにとって見ればその活動は、日常的に利用するローカルビーチをいつもよりも大規模で時間をかけて清掃するようなものだ。よって彼らにとっては、サーフィン文化の担い手としてその規範に従って行っている。

一方で、小学生や中学生にとってこの海岸は、自然教育活動の一環で毎年行われるアカウミガメの放流会で利用している環境なのである。そのため、アカウミガメが来年も戻ってきてくれるようにという思いで清掃活動に取り組む児童・生徒が多かった。自衛隊員にとっては、地域貢献とボランティア活動の一行事として位置づけられている。

この共同作業は、それぞれのアクターの利用における意識が絡み合っている活動であり、それぞれの目的に基づいて集まっている使命共同体と、集落に昔から伝わる作業を遂行するために集まっている伝統的な共同体が混ざり合って構成されている。このような共同体の中で、サーファー達は自らのサーフィン文化の一端を担う清掃活動と、地域の一員として行う義務的な活動が「ビーチクリーン」という形で同時に遂行されている。このような活動の継続によって、移住者サーファー達に、砂浜の利用が認められていくことも明らかになったのである。

こうした活動によって「地元」は活動を通して移住者サーファー家族を認識し、協同していく場所アイデンティティを共有する一員として活動を行うようになったという変化が起こっていることが明らかになった。

### 3.3 火祭りと移住者サーファー達

その他にも、地域において変化が起きている事象がある。市木地区全体で行われる祭事において、移住者サーファーが参画し、祭りの担い手として位置づけられるようになったのである。

市木地区では毎年 9 月の満月の夜に、市木古式十五夜柱松「火祭り」という地域の年中

行事が開催されている。火祭りは女人禁制で、勢子と呼ばれる各部落を代表する男性達がいまつに火を付け、高さ 20 m の松の木の上部にある藁で練られた逆傘上の籠になげ入れて 1 番火を競うという市木地区最大の祭りである（写真 8）。この祭りにも市木地区に住まう人々が 1 年かけて準備をし、市木地区らしさを形成する活動となっていることから、「地元」としての場所アイデンティティを代表する意味合いがあると考えられる。本調査では、筆者が火祭りの準備から手伝いという形で参加したことで、結果的に勢子で参加することが可能になったため、その参与観察の内容を記述する。



写真 4：火祭りのポスター（2019/9/15 筆者撮影）

火祭りでは、1 番先に火を投げ入れたものがその年の「1 番火」として年男になり、年男が住まう部落は豊作になるという言い伝えがある。江戸時代あたりから始まった行事であり、各部落の稲刈り後の田畑で大蛇を退治して豊作を祝う神事であったようだ。しかし高度経済成長の最中、地区の若者が流出したことで勢子や運営の担い手不足が起こったことにより衰退していた。しかし今から 20 数年前に地域の歴史研究をしていた男性と地域



の共同で復活することになった。

しかし、少子高齢化の煽りを受けたことで祭りが一時衰退しかけていたのだが、移住してきたサーファー家族の男性陣の参加によって継続できている。ここ数年では祭りの担い手のうち、勢子を若い 30 代 40 代の移住者サーファーの男性が行っている割合が多くなってきた。

火祭り会場は、2500㎡ほどの公園の中央奥よりに松の木が横になった状態で置いてあり、その松を中心とした周囲 10 m は安全性が考慮され、ロープで囲われている。その周辺ではステージが開設され、演奏や演舞が行われる。またステージの対面には、PTA や JA などが食事を販売するブースや近年オープンしたカフェの特設、お祭りの露店が数件立ち並んでいた。今年はおおむね 300 人ほど・住民と住民の親戚や友人が来きているようだった。

月が出る夜 7 時頃になると勢子たちが、公園のそばにある岩折神社に集まった。神社で神主からお払いと禊を受けて身を清める。その後、「大蛇」に扮した長さ 5 m ほどの大きな綱を頭の上に抱え上げて、神主、市木地区の自治会代表、火祭りの実行委員長を先頭に会場まで運んでいく。会場の入り口から反対に置かれた松に向かって太鼓と鐘を鳴らしながら、勢子達の一行は会場へと歩いていく。

会場の門から松までの道中は、地区住民がそれぞれの部落代表の勢子に声をかけたり写真を取ったりするするなどして進んでいく。運び終えた「大蛇」は、勢子の数人によってとぐろを巻いた状態にされて松の傍らに置かれた。その場で、再度神主は松と勢子に対してお祓いを行った。祓いが終了すると横たわった松を人力で起こしていく。方法は、又と呼ばれる 2 本の杉の木で作られた X 型の組木を使用する。3 つの又があり、それぞれ 1 番又・2 番又・3 番又と勢子の役割が分かれている。

まず、1 番又を松の下から入れて、松を少し起こす。そして 2 番又を 1 番又が支える松の上に入れながら協力して起こしていく。2 番又に重心をかけ、1 番又を松の後方に下げて再度松を起こしていく。その次に 3 番又を 2 番又が支える松の上に入れながら支えていく。それぞれ又を支えながら起こしてまっすぐになったところで、松についている 3 本の長い縄で各方角から放射状に引っ張って支えを作り、それぞれの又を各方向から差し込んで安定させる。そうして柱松は立ち上がるのである（写真 5）。



写真5：柱松の様子（2019/9/15 筆者撮影）

この工程が終わった後、「大蛇」をそれぞれの又に沿うようにして巻いていく。その巻いた「大蛇」に投げ入れるたいまつを掲げ、祈りを捧げる。祈りが終わると、まず神主がたいまつを上へ放り投げる。これが祭りの合図であり、その後勢子達はたいまつを投げ入れていくのである。今年は、例年に対して1時間経っても火が入らないという状態が続いた。勢子の体力も限界を迎えていく。体力がある勢子は投げ続けた。しかし、1時間半経っても火が入らない。さらに用意していたたいまつの数にも限界があり尽きてしまったのである。

それでも、諦めないNさんという男性がいた。彼は3.11が発生したあとに家族で市木地区に移住してきた3人の子供がいる父親である。30代後半で、現在は海水から天然塩を作る技法を地区の老人から教わり、独立して事業を始めている。さらに彼はサーファーでもある。彼はまず、燃え尽きたたいまつを集めて木を出していった。それから燃えそうな木だけを集めてまたたいまつを再構築した。それを見た周りのサーファー仲間の人たちも彼に協力してたいまつを作っていた。勢子達は「エイエイエイサー」という掛け声と

共に火を投げ入れた。若手の30代の勢子達も火を入れようと再度挑戦した。また周辺で見ていた勢子たちは、たいまつを作り協力していた。

夜9時になって1番火が入り、見ていた観衆から歓声が上がった。今年の1番火はNさんだった。火が入ると松の籠には火薬が仕掛けてあり、花火が上がる。しかし今年は湿気も多かったことがあり、たいまつは入ったものの着火しなかったため、松を傾けて着火した。花火が上がり火祭りの終わりを告げる音楽が流れ、令和最初の年男のインタビューが行われた。Nさんはインタビューの中で「仲間の協力と地域の声援があってやっと入れることができました」と話した。このような祭事を通して移住してきた人々は認知され、祭りの勢子という地域文化の担い手になっている。移住者サーファー達の特に男性は、ここで所属の部落と名前を他の部落の人々から認知されるのである。基本的に運営や計画は「地元」の各部落の自治会長達の連合によって行われているが、準備や勢子は移住者サーファー達の男性が担っている。こうした分業化によって、地域で役割を与えられたよそ者が「地元」へ収斂していく様相を見ることができた。

移住者サーファー達は2年目3年目と年度を追うごとに、火祭りの担い手として、新人に祭りの要領を教えていくことで「地元」民として振舞う様子も確認することができたのである。こうした地域活動の継続が、「移住者」というスティグマを薄めていくと同時に、地域の文化の担い手として認められていく構造がそこには存在した。「地元」は地域行事の担い手として彼らを位置づけるという形で場所アイデンティティを維持し再生産していることが明らかになった。

#### 4 観光によって再構築される地域社会の場所アイデンティティ

近年は、幸島を取り巻く観光によって、移住者サーファー達には様々な役割が地域において付帯されてきている。前節でも述べたように、幸島という観光資源を維持する役割を彼らが担うこともそれに該当する。近年は「TAGIRI HOTEL」における移住者サーファー達の取り組みが「地元」社会の観光の役割を担う一例として定着してきた。

2016年より営業が開始された「TAGIRI HOTEL」は、旅行サイトトリップアドバイザーで星5つをつけ、航空会社のピーチエアラインで特集されるほどの有名な隠れ家的ホテルへと変貌していった。ここは、市木地区で唯一宿泊業の役割を担う場所である。

以前は2014年まで「たぎり荘」という名前で民宿がなされていた。しかし、実態としては宿泊客も少なく、民宿の中にある日帰り温泉が「地元」民に利用される場所であった

ため、宿泊業としての機能は果たされていない状況があった。そのため、ニホンザル見学の観光客やビジターサーファーは、隣接する市町村か宮崎市内に宿泊し、日帰り観光として幸島へ訪れるようになっていたのである。また、観光の観点では、幸島から15キロほど南下した場所には都井岬という野生馬で有名な観光地があり、むしろ幸島は目的地というよりは通過点である認識の方があり、宿泊して観光する場所ではなかったのである。

しかし、2016年にこのホテルがオープンしたことをきっかけに、幸島やその周辺を観光の目的地として来訪する宿泊の観光客が訪れるようになっていた。観光客の目的にさらに注目すると、幸島を目的としてサーフィンで訪れる宿泊観光客も当然ながら増加している。そうした新しい宿泊客を呼び入れる役割を担う存在として、移住者サーファー達は位置づけられるようになったのである。こうした取り組みを主導しているKさんは、ここまでのプロセスに関して「地元」に配慮し、慎重に行ってきたという。例えば、髪型やヒゲ、服装などはホテルを営業する時は整えている。こうした行為は、彼らが「地元」からのまなざしを意識し、サーフィン文化を表象する記号を変化させて対応していることを意味している。ホテルもサーフィンも地域社会の資源があって成立するものであるため、資源管理の権利を主に有している「地元」を意識しながらこれまで構築されてきたものを維持するために、サーフィン文化を変容させていると分析することができる。

さらに、ホテル改装の資金調達に着目すると彼らの文化と思考が見えてくる。このホテルは、近年の資金調達の方法として注目されている「クラウド・ファウンディング」を利用して行われた。「クラウド・ファウンディング」の仕組みは、インターネットで自らの夢や目的を具体化し、それに関する企画の詳細とそれを実現するための目標金額を掲載する。その記事を見た人々が気に入った企画に投資して資金が調達される。提供された側は、企画を遂行すると共に、投資者に対して物や企画などで「お返し」をするというものである。「TAGIRI HOTEL」では、86名の投資者から目標金額20万円を上回る124万円を調達しホテルの改装を行ったのである。この方式を利用することによって、資金を調達だけでなく、企画に関してのファンを増やすこともできるのである。彼らは、ホテルへの宿泊権を「お返し」にしていたことによって、ホテル完成時にはすでに数十名の宿泊客を確保できていたというわけである。こうした仕組みを利用し、彼らは「地元」に新たな産業を生み出しているのである。クラウド・ファウンディングの記事では、以下のように彼らのコンセプトが書かれていた。

### 新しい働き方・暮らし方を体現する場

TAGIRI HOTEL のメンバーは殆どが県外からの移住者。慌ただしい都会での生活を経験し、それぞれの道で活躍をし、その上で生き方をみつめ直し、宮崎での暮らしを選択しました。だからここでは、働くこと・暮らすことに、みんな丁寧に向き合っています。

例えば、週に4日働き、残りの日は家族のため、趣味のために費やす。そんな働き方もここでは可能です。それは決してぐうたらな生活ということではなく、毎日を、毎時間を大事に生きていくということ。

Makuake HP <https://www.makuake.com/project/tagirihotel/> より

彼らのライフスタイルでは、家族とサーフィンの重要度が高く位置づけられており、仕事はそれを遂行するための手段的としての役割を担っていることが分かる。彼らは、新たなライフスタイルを求めて移住した人々であり、「TAGIRI HOTEL」のように「地元」において自らの文化や思考を具現化して暮らしを創造しているのである。そのような創造された空間は「地元」民によっても利用されるようになってきた。特に、カフェスペースにおける利用と温泉の利用が顕著に見られる。カフェスペースでは、「地元」の高齢者の誕生日会が開かれることや、地域の女性等の憩いの場として利用されるようになったのである。温泉では宿泊者と「地元」民が交流する場所になっている。以前は幸島が「地元」民と観光客を繋げる場所であったが、それに追加してこのホテルの温泉が「地元」と宿泊観光客との交流を生み出す創造の場所としての機能を担うようになった。このように「TAGIRI HOTEL」という移住者サーファー達によって、新たに創られた場所が「地元」民にも利用されることで、宿泊観光客や移住者との交流を生み出している。「地元」民に利用されるようになったのは、移住者サーファー達のこれまで経験した「地元」からの排外意識に対応するために、地域資源の温泉をそのまま残し、「地元」の場所アイデンティティを再構築させたからである。これまでは学術的な観光地であったが、2016年以降は、移住者サーファー達の観光業への参入と宿泊業の復活により、サーフィンとしての観光地が定着していつている。そうしたことで、「地元」における景観の変化も現れてきた。

また、来訪する客層を見ると観光客のグローバル化が進行していることが分かる。観光客の増加に伴って、多言語対応の石版が石波海岸の駐車場に設置された。石版には幸島についての説明が英語・中国語・韓国語で記載されている。来訪する多様な国々の観光客に

対応するために、行政も観光地としての幸島を強化していこうとする動きが見られるようになってきたのである。

さらに、以下の表1は、幸島の対岸に設置されていた来訪の感想を記録する雑記帳の2016年から2019年まで実施したデータを収集し、日本人観光客と外国人観光客を区分して図表化したものである。

表1：幸島に来訪した観光客の割合図（筆者作成）

年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年
日本人観光客数（人）	152	91	80	45
外国人観光客数（人）	43	22	30	21
外国人観光客の割合	28.20%	24.10%	37.50%	46.60%
調査期間	通年	通年	通年	1 月 - 10 月

N = 484

この表から見ると、2016 年以降、雑記帳に記録した観光客数は減少しているものの、インバウンド観光客の割合は2016 年の約 28%から4 年後の2019 年10 月現在約 46%まで増加していることが分かる。こうした背景には、現在日本全土で進行している外国人観光客の増加が相まっていることもあるが、移住者サーファー達による観光地としての場所アイデンティティの再構築が影響していると推察できる。このように、移住者サーファー達の観光の取り組みによって、ローカルな次元にあった場所アイデンティティがグローバルな次元へと推移していったことが明らかになったのである。

## 5 おわりに

本論では、サーフィンの主因としてライフスタイル移住する人々のプロセスにおける地域社会との相互作用を「場所アイデンティティ」概念から明らかにした。

宮崎県の地理的特徴やサーファー達の繋がりによって市木地区では、移住が加速し、サーフィンを主因とする移住に適した場所が構築されてきた。現地調査の結果では約 100 名以上の人々がサーフィンによって転入してきていることが明らかになった。移住者サーファー達は、3.11 の影響を契機にサーフィンの環境と子育ての環境を求めて、ライフスタイル移住を行う文化的なアイデンティティを有した人々である。一方で、彼らの地域社会

における実践によって、よそ者としての地理的距離だけでなく、サーフィン文化の文化的距離が内包された「移住者」としてのスティグマが形成されてきていたのだ。

また、はじめは、石波海岸は幸島が対岸に存在する関係で、京都大学やその他の大学の研究者が利用する場になっていたため、歴史的に学術的な正当性を持つ観光地として認識されていたのだが、ローカルサーファー、移住者サーファー達の日常的な利用やビジターサーファーなどの様々なよそ者の来訪の継続が、サーフィンの場所性を構築していった。

さらに、地域社会の共有地である石波海岸においてよそ者との接触を考慮に入れた規範が形成され、ローカルルールが石波海岸におけるのそれぞれのアクターの実践によって、規範を視覚的に示すために看板で周知されるようになったのである。サーフィン文化が地域における場所アイデンティティを構築し、地域社会の規範を形成する一助となった様子が見てとれる。

移住者サーファー達の日常的実践に視点を移すと、共同作業であるビーチクリーンや地域の祭事などの「地元」との協同が、彼らを地域の一員として規定する構造があった。このような過程は、彼らが「移住者」というスティグマを失っていくメカニズムを内包していたのである。そのメカニズムの循環が地域への信頼へと繋がり、移住者サーファー達が地域社会における場所アイデンティティを構成するアクターとして、「地元」を維持していく一員として認められ、地域資源の利用により参画するようになった。

さらに、観光という地域社会における産業が、彼らの文化を定着させうる場所を与えた。移住者サーファー達が作り出した観光産業の影響によって、グローバルな観光地としての場所アイデンティティが再構築され、サーフィン文化が定着していったことが明らかになったのである。

本論では、サーフィンを対象に地域社会で生活する人々の実践を紐解く中で、場所アイデンティティが再構築、生産された過程を見ることができた。こうした一連のプロセスを分析したことで明らかになったのは、スポーツが地域社会を観光地や移住地として他者に開放するだけでなく、人々の移動の中軸となり、地域に産業を生み出す原動力になっているという事実である。スポーツは、地域社会をグローバルな領域で展開させ、文化的・社会的に再構築していく大いなる可能性をもった存在である

(注)

- <sup>1</sup> 仕事や政治的難民などの伝統的に言及された理由ではなく、生活の質（QOL）を追い求めることを主因とする人口移動のことである（Benson 2009）。
- <sup>2</sup> この海岸の海岸樹林は、「タブノキ」「ハマカズラ」「ハナタチバナ」など約 250 種の亜熱帯性植物群で構成されている天然の海岸樹林で古くから状態を保っているため、天然記念物に指定されている（串間市 HP <http://www.city.kushima.lg.jp/enjoy/bunka/cat3/post-11.html>）
- <sup>3</sup> ショートボードとは、一般的に 160cm ～ 190cm 程のサイズで、ミディアムは 200cm ～ 260cm、ロングボードは 9 フィート（約 274cm）に分類されている。

<参考・引用文献>

- Anthony Giddens, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in Late Modern age, Polity.*（＝2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社。）
- Belinda wheaton, 2013, *The Cultural Politics of Lifestyle Sports*, Routledge.（＝2019, 市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳『サーフィン・スケートボード・パスクール—ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版。）
- Benson, M., 2011, “The British in Rural France: Lifestyle Migration and the Ongoing Quest for a Better Way of Life” Manchester University Press, Manchester.
- Edward Relph, 1999, *Place and Placelessness*, Pion Limited（＝1999, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学——没場所性を越えて』ちくま学芸文庫。）
- Erik H. Erikson., 1959, *Identity and Life cycle*, International Universities Press.（＝2011, 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房。）
- , 1968, *Identity : Youth and Crisis*, W. W. North & Company.（＝2017, 中島由恵訳『アイデンティティ——青年と危機』新曜社。）
- Hall, S., 1980, *Encoding/Decoding*, Stuart Hall et al. eds., *Culture, Media, Language*, Hutchinson, 128-38.
- 堀野正人, 2004, 「地域と観光のまなざし——『まちづくり観光』論に欠ける視点」, 遠藤英樹・堀野正人編『観光のまなざし』の転回——越境する観光学』7:114-129, 春風社, .
- Howard .S. Becker, 1963, “Outsiders Studies in the sociology of deviance” New York: The Free Press.
- 平井健文, 2018, 「文化遺産保存の行為者としての＜愛好家＞——地域社会との関係性の考察を中心に——」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』26 : 21-38.
- 猪瀬浩平, 2006, 「『学習』という通路——見沼田んぼ福祉農園の実践をめぐる『よそ者』論の検討」『環境社会学研究』12 : 150-64.
- 石川菜央, 2018, 「ライフスタイル移住の観点から見た日本の田園回帰」『広島大学総合博物館研究報告』10: 1-11.
- Urry, J., 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, SagePublications.（＝1995, 加太宏邦訳『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局。）
- 鬼頭秀一, 1998, 「環境運動／環境理念研究における『よそ者』論の射程——諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に——」『環境社会学研究』4 : 44-59.
- 金成政, 2017, 「戦後ソウルと日本人旅行者——江南誕生による場所の再構造化」, 金成政・岡本亮輔・周倩編『東アジア観光学』10-36, 亜紀書房.
- , 2018, 『K-POP 新感覚のメディア』岩波新書.
- 小長谷悠紀, 2005, 「日本におけるサーフィンの受容過程」『立教大学観光学部紀要』7 : 1-16.
- , 2009, 「サーフィン文化の形成と空間というメディア」, 神田孝治編著『レジャーの空間－諸相とアプローチ－』59-67, ナカニシヤ出版.
- 丸山康司, 2005, 「環境創造における社会のダイナミズム——風力発電事業へのアクターネットワーク理論の適応」『環境社会学研究』11 : 131-44.
- 松村和則, 1999, 「山村再生と環境保全活動——『自由空間』と『よそ者』の交錯——」『環境社会学研究』5 : 21-37.
- 水野英莉, 2002, 「スポーツと下位文化についての一考察：X・サーフ・ショップにみられる『男性文化』」『京都



サーフィンによるライフスタイル移住と場所アイデンティティの再構築  
—宮崎県幸島周辺のサーファーを事例に—

- 社会学年報 10: 35-60.
- 村田周祐, 2018, 「漁師に転身したサーファーのライフヒストリー——龍太郎の夢——」『東北福祉大学研究紀要』 37: 241-259.
- 長友淳, 2007, 「90 年代日本社会における社会変動とオーストラリアへの日本人移民—ライフスタイル価値観の変化と移住のつながり—」『オーストラリア研究紀要』 33: 177-200.
- , 2015, 「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向: 移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して」『国際学研究』 4(1): 23-32.
- 内藤考至, 2004, 「種子島のサーファー移住: 自然発見と新たな人間的結合の創出」『経済学論集』 61: 25-27.
- 大野哲也, 2011, 「アイデンティティの再肯定——アジアを旅する日本人バックパッカーの『自分探し』の帰結——」『社会学部紀要』 111: 155-170.
- , 2012, 「『危険』を消費する: 日本人バックパッカーが旅で経験するスリルの文化・社会的意味」『コンタクト・ゾーン』 5: 173-195.
- 小田切徳美, 2014, 『農山村は消滅しない』岩波書店.
- 菅豊, 2005, 「コモنزと正当性——『公益』の発見」『環境社会学研究』 11: 22-38.
- Susanne Klien, 2019, "Entrepreneurial selves, governmentality and lifestyle migrants in rural Japan", Asian Anthropology, Routledge.
- 須藤廣, 2012, 「ツーリズムとポストモダン社会——後期近代における観光の両義性」明石書店.
- 武知実波, 2018, 「サーフィンツーリズムを活かした地域活性化策の課題——東洋町生見海岸の地域デザインを事例に——」徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻平成 29 年度修士論文.
- 田中研之輔, 2016, 『都市に刻む軌道——スケートボーダーのエスノグラフィー』新曜社.
- 谷川典大, 2004, 「大隅諸島への移住者とコミュニティショート・ライフヒストリーと語り」『人文地理』 56(4): 63-79.
- 徳田剛, 2005, 「よそ者概念の問題機制——『専門家のまなざし』と『移民のまなざし』の比較から」『ソシオロジ』 49(3): 3-18.
- 鳥越皓之, 1997, 「コモنزの利用権を享受する者」『環境社会学研究』 3: 5-14.
- 山口博史, 2018, 「非大都市部への〈移住〉者による地域的ライフスタイルの受容——山梨県都留市での調査から——」『地域社会学年報』 30: 65-79.
- 山中速人・長谷川司, 2007, 「メディアと観光——『太平洋の南国』ハワイと『南国』宮崎におけるイメージの構築——」山下晋司編『観光文化学』 41-47, 新曜社.
- Wills. P., 1977, Learning to labour: how working class kids get working class jobs, Ashgate publishing Limited. (= 1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.)
- 吉見俊哉, 2018, 『戦後と災後の間——溶融するメディアと社会』集英社新書.
- Zygmunt Bauman, 2000, Liquid Modernity, Polity Press. (2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ』大月書店.)
- , 2005, Liquid Life, Polity Press. (= 2008, 長谷川啓介訳『リキッド・ライフ——現代における生の諸相』大月書店.)
- Zygmunt Bauman / Tim May, 2001, Thinking Sociologically, Wiley-Blackwell. (= 2016, 奥井智訳『社会学の考え方』ちくま学芸文庫.)

<参考資料>

- 串間市ホームページ, 2016, 「串間市 (に相当する地域) の人口推移」「市木浜クリーン大作戦」「観光地幸島の概要」(2019.9.20 <http://www.city.kushima.lg.jp/main/info/cat14/cat3/2810.html>).
- 「宮崎・日向で『観光モニターツアー』サーフィン体験や古民家でワークショップも」, 『日向経済新聞』, (<https://hyuga.keizai.biz/headline/697/>) 2019.9.11 閲覧.
- MeLike 編集部, 2017, 「“これからの時代の豊かさ”を体感できる空間を宮崎から提案」.
- MeLike—未来区, (2018.3.10 閲覧, <http://melike.info/article/2274/>).
- Makuake 編集部, 2016, 「<タギリホテル>は全てDIYの懐かしくてセンスのいい空間。宮崎県串間にオープン!」.
- Makuake, (2018.9.11 閲覧 <https://www.makuake.com/project/tagirihotel/>).
- 「日本サーフィン連盟」(<https://www.nsa-surf.org/>) 2019.9.20 閲覧.
- 「サーフィン移住はいかが?」, 『宮崎日日新聞』, (2019.9.15 朝刊).
- 「Type sea」(<https://typesea.net/archives/1391>) 2019.9.20 閲覧.